2022年度第２回　開志専門職大学 事業創造学部
教育課程連携協議会　議事録

1. 日　時：2022 年 3 月 22 日（水）13：00～15:00

2. 会　場：開志専門職大学　紫竹山キャンパス　7 階会議室
（オンラインでの参加者は Teams にて参加）

3. 出席者：徳田賢二委員長、向正道委員、唐木宏一 委員、武田修美 委員、田中豊 委員
誌上参加：内藤晃子 委員
事務局：遠田孝之 学務部課長兼社会連携推進課課長、今井泰子
欠席者：葉葺正幸 委員

4. 議　事：

●徳田委員長より挨拶

現段階、AC 期間内のカリキュラムであり、今後、AC 期間終了後をどのように発展させていくかについて委員の皆さまから大変真摯な、我々にとってとても重要な意見をたくさん頂いてきた。そのようなご意見・アドバイスを踏まえ、現時点のカリキュラムのどこに問題があるか・どう克服するかということに取り組んできた。学部のみならず、大学として最優先事項となっており学長とも連携を取りながら進めている。今は途中の段階ではあるが、皆様からまたご意見を頂きたいと思う。そのご意見を元に、また検討を進めていきたいと思う。

（１）2022 年度　教育課程に関する報告と質疑応答
１）事業創造学部学生状況
●学生状況報告（事務局　遠田）
以下、今年度の３月末時点での予測在籍数
・1 年生：59 名　・２年生：47 名　・３年生：57 名　　・合計：163 名
現在も退学抑止、退学手続きが続いている状況。
今年度は 62 名の入学がありスタートをしたが、３月末時点では３名が休学・退学となる状況。１年生だけでなく、２年次・３年次においても退学が出ている状況がある。
2022 年度合計は退学が９名の予定。除籍はなし。退学率は 5.23%となる。退学は２名の目標であったが、大幅に増となった。
また、休学については「創業活動を目的とする休学制度」が今年の２月に制定され、現在３名の学生がこの制度を利用して１年間の休学を申し出ている。
大学の退学率の指標として、労働政策研究・研修機構（2015）より、平均 2.0%、私立大学だと 2.9%と示されている。ただし偏差値が低い大学ほど退学率は高い傾向にある。

・2022 年度休・退学に関する報告
前期には２名の退学者（２名とも前年度以前から退学希望者、休学者であった)。また、精神疾患により３名が休学となった。後期は前期から休学だった３名のすべてが退学を表明したが、１名は休学延長となった。
現状でも、学務課だけでなく、看護師・校医・カウンセラーなどさまざまな人と連携をして対応をしてきたが、精神疾患の学生に対しての対応はまだ継続しての課題となる。
また、入試が大きなハードルとなっていないことも懸念点としているが、一方で入学者を集めなければならないという課題もある。動機がなかなか弱い学生に対して、入学をしてきた後のフォローをしっかりしていきたい。４年生は総合実習などで少数指導の機会が増えてくるので、その成果も次年度以降の検証事項となる。

・就職活動状況について
現在８割強の学生が民間就職を希望している。その他は公務員・大学院進学・起業・留学・留年の可能性ありなどがある。概ね活動が出来ている状況ではあるが、動きの遅い学生に対しては適宜キャリアセンターがサポートをしていく。

徳田委員長：退学抑止については学生委員会・学務課が中心となって綿密に対応をしているがこのような現状がある。就職活動については 3/1 に情報解禁となり、ようやく活発化しているように見られる。少人数制の大学という特性を生かし、教職員一丸となって対応をしているところである。

田中委員：企業希望の４名７％というのは、他大学と比べると多いのか？少ないのか？はわかることなのか
事務局遠田：他大学との比較については現在情報がないので、調べてご報告できるようにしたい。
唐木委員：創業活動を目的としての休学制度というのは、制度としては妥当だと考える一方で、事創大の方では、事業承継を予定して入学した留学生がコロナ禍のために現地からオンラインで受講をして、その間に自身の事業が軌道に乗ると復学をする理由がなくなってしまい、そのまま退学になるケースが数件あった。学生にとっては妥当な制度だと思うが、復学するインセンティブをつくる必要があると考えた。
また、精神疾患を抱える学生の対応については事創大でも挙がっている問題。ここにあがっている以上の対応はなかなか難しいとは思うが、事務局と演習担当教員が対応をしている。
向委員：精神疾患の理由としては大学生活だけが原因ではないと思われる例もある。最近の傾向としては入学当初から出席できていないなどの状況、２年生以上については大学が

理由（授業についてこれない・朝起きられないなど）となってしまっているケースもある。入学前からの要因を抱えている学生が何割かはいることを想定して対応をしていかなければいけないと思っている。
また、創業目的の休学を予定している学生の成績は優秀で、３年次までの単位取得は問題ない学生。インセンティブという点に関しては、卒業をすることの意味をしっかり話をしていく必要があると思っている。

徳田委員長：起業支援については、大学にとってもとても重要なポイント。起業を希望している学生の希望を汲んで、学長以下、どのようなサポートが適切なのか考えながら進めているところである。
精神疾患を抱える学生の問題は、学力の問題とも関係している部分もある。ただ、学生募集がうまく進んでいないため、大きな策を講じられていないことが現状である。入口をテコ入れしなければならないことも現実問題である。

２）事業創造学部　運営報告　資料４
３）キャリアセンターイベント
●事務局遠田より報告
・３年生の実習として４月から「新規商品開発・販売実習Ⅱ」が新たに開始
・５月から、新たな取り組みとして、キャリアセンターが本格的に稼働開始
　週１回～２週に１回のペースで夏のインターンシップ・就職活動に向けての準備講座を開講していった。後期にもレベル UP した内容で再度行っていく。
ただし、結果として参加者は毎回ほぼ１桁の人数となり、意欲をどのように持っていくか、参加を促していくかが今後の課題。
・６月に「開志ビジネスプランコンテスト」を開催。全国の高校生にも参加を呼び掛けて開催をした。前年度のグランプリの学生がすでに起業をしており、参加をした学生が順調に起業へ結びついて行っている。
・６月に初めての取り組みとして、臨地実務実習の「中間報告会」を開催。
・8 月：県外実習者向けオリエンテーションを開催。今年度、初めて県外企業での実習を行った。（３社）モチベーションの高い、優秀な学生が多く参加し、とてもいい刺激を受けて帰ってきている。
・10 月：２年生に向けて「就活スタートアップガイダンス」を開催。
・10 月：第２回橙華祭を開催。425 名来校。一般客も入れての開催として、前年比プラス 165％の来場があった。次年度は 6/25（日）の開催を予定している。
・12 月：2022 年度第１回の教育課程連携協議会を開催。委員の皆様からも多くの素晴らしい意見を頂き、カリキュラム改訂などに活かしていくことができた。

武田委員：トップランナー研究を担当させてもらい、学生との繋がりもでき、いい刺激をもらっている。その中で、３年目になりとても反応が良かったことから、その場で質疑応答ができ、リアルタイムでやり取りできるような内容になったらいいと思う。そのような仕組みはできるか？
事務局遠田：担当教員がいるので、次年度のリアルタイムでの質疑応答などができるような形ができるか検討していきたい。
武田委員：今ある質疑応答のスタイルだと、チームでむりやり引き出している感じもある。主体性がある話が出来たらいいと思う。事前に聞いてみたいことがあったりすればそれが聞けるような形が出来たらいい。教員ともやり取りを直接しているので、そこでも話をしていきたい。
武田委員：こちらからゲスト講師を紹介するのはありか？
具体的に挙げると、アップルの副社長や、YouTube もやっている若手起業家などもいるので、学生の年齢に近い人もいるので、そのような話も学生に聞いてもらえると面白いのではないかと思う。また別途相談をさせて頂きたい。
徳田委員長：適切な人材にお話しいただけるようにぜひ、検討をしていきたい。
皆さまから多くのご協力を頂いて、ゲスト講師なども来ていただいている。別途セミナーなども開催しているので、ぜひご相談させてもらいたい。
向委員：質問になるが、トップランナー研究は１年生のカリキュラムではあるが、この授業は１年生が適切なのか、それよりも高学年の方が適切か？意見を頂きたい。カリキュラムを検討する上でも議論になった。
田中委員：１年生に話をしてもなかなか意図が伝わらないこともあると感じている。
自分の経験や体験を話す時に、本当に自分の人生の岐路を考える学年に話をした方がつたわるのではないかと思う。その方が、影響力を与えることもできると感じる。
武田委員：同意見。１年生には１年生に伝わることはあると思うが、３年生の方がよりいいと思う。

（２）カリキュラム改訂進捗状況
まもなく、新年度募集のパンフレットが出来上がるので、その一部も添付している。
1.２コースの設置をおこなう。
起業家を目指す学生だけが入学するわけではないので、入り口が就職である学生のためもコースも設置した。
2.カリキュラム体系図の見直し
①ポリシーは変更していないが、学年ごとの修得目標を細かく設定した。
②科目分類を設定し、それに沿った科目を配置する。わかりやすく科目名を変更することもした

③学年別に講義～実習までが連動するように繋がりを意識して再配置
3.新規科目・名称変更
１）精神疾患をもつ学生の対応にも役立つ、基礎ゼミの設置
２）学生募集にもインパクトを与えられる新規科目の追加話題性のあるもの、コースごとに特色ある科目

4.臨地実務実習に関する変更
１） ５科目性から３科目性へ変更。
２）期間集中型で実習成果の向上をはかる。
３）いきなり現場へ行くのではなく、学内実習をおこない、事前の学修をしてから実習へいく。終了後には事後指導を学内でおこない、実習フォローをしっかり行う。
４）臨地実務実習に必要な前提知識・経験値の明確化と科目体系の構築

５.今後の課題、検討事項
1） ３学部共通科目の設置
2）人事に関わることでもあるので、センシティブな内容。いつが適切なのか検討
3）実習集中化における懸念事項
4）科目体系の精査を継続していく

パンフレットは文字、ページを多くするのではなく、新たに開発したアプリへ誘導して、そこで情報を発信できるようにする。

向委員：科目体系の精査について、科目が多くなっていっている状況。
学内と臨地のサンドウィッチ型の実習について、企業の負担も考え、すべてを企業内で行うのではなく、学内での学修を前後で行う。今までは時間外に行われることもあった報告会なども 300 時間の中に含めて行うことを計画している。これを行うことにより、実際に企業内での実習としては現状の 150 時間が 1.5 倍程度になる予定。
今後、企業へのヒアリングを含めて行っていく。

徳田委員長：委員の皆さまの意見も反映させてカリキュラムの検討を行ってきて、このパンフレットにも盛り込んできた。お気づきの点やさらなるご意見があれば頂きたい。

唐木委員：２コース制はとても現実的な、学生のニーズに対応できる方策であると思った。コースによって必修科目も再検討を行ったということは事創大でも考えているところ。
就職をする人は、企業内でどのように活躍できる能力を持っているかは重要なところだと

思う。そのためには様々な科目を選択できるようにすることは妥当なところだと思う。
一方で、新しく作る科目をどこまで充実させるか、科目が増えすぎていないかが懸念事項。必修科目にするなら、その科目を教える教員が足りているのかなどがこれから検討していかなければならないところだと思う。
大変な作業ではあるが、適切な考えで合って、学生募集にも繋がっていく取組であると考える。

向委員：会社設立実習Ⅰ、Ⅱ、Ⅲとあるような科目がいくつもあったが、それを２つにまとめた科目にすることなどで科目数を調整。重複している内容の授業やカバーする範囲を広げられる科目もあったので、それも整理をした。増やし過ぎないようにすることで、教員が充足できるように検討している。

唐木委員：学年ごとのＤＰを設定するとあるが、最終的なＤＰを達成するためにどのようにやっていくかより具体化するという点でも、学生を置いてきぼりにしないためにもこのコース設定はいいと思った。
事創大でも一部の科目にしか導入はできていないが、ルーブリックで学生自身が進捗状況・到達目標を確認できるというシステムもあるので、そのようなことを取り入れるのもいいのではないか。

田中委員：非常に変革があって、いい取組だと感じた。

武田委員：コースが分かれるようになることで、わかりやすくなったので非常にいいと思う。

徳田委員長：委員の皆さまからのご意見を具体化しようとやってきたことがあるので、そのように言っていただけるとありがたい。
現在、向委員を中心に精力的にベストな形になるように尽力して頂いているが、５月ぐらいには最終形が見えてくるようにしていきたい。
ルーブリックについては唐木先生以外にも学外からも提案を頂いているが、導入するとなると準備が必要になるので慎重に検討していきたい。

武田委員：臨地実務実習は専門職大学においてキモになるところだと思うので、この実習の魅力が学生たちに伝わることはもちろんのこと、県内企業・関わる企業にとってもいいものになったらと思っている。そこに関して、先日、遠田課長とも打合せをした。
現状、受け入れ企業ではないところに意見を聞くと、「時間がとられそう」との意見がまず出て来てネックになる印象。いろいろ聞くとここがやはりイメージになっているので、

急いで進めるよりもう少し課題を自分たちに落とし込んでから策を立てていきたい。

事務局遠田：2023 年度はなんとか実習がスタートできるだけの数がそろったが、継続して受入をしていただける企業が減ってきていることが課題だと思う。何かメリットになることを打ち出せるかどうかも広くかかわってくると感じているので、今後も継続して話をさせて頂きたい。

徳田委員長：我々としても、実習は大学のキモ中のキモだと思っている。以前から委員の皆さまからの意見にもあった、大学も企業も WINWIN になることが重要だと思っている。それにむけて、委員の皆さまからもご意見を頂き、さらに引き続き、武田委員にはご提案を頂けるということでご協力をお願いしたい。改善を図っていくことで、世間の認知に関わっていくことだと感じている。

【全体を通してコメント】
唐木委員：実習は専門職大学にとって、最重要なポイントであり、円滑かつ効果的に運用していくためには、企業にとっても有意義であることにすることが重要。具体的にそれを見せられることが重要であると考える。企業に了解して頂く、そのための工夫が今後、必要になると思う。

田中委員：自分で考えて行動していく、ビジネスプランコンテストの充実が大切だと思う。
日刊工業新聞主催のキャンパスベンチャーグランプリの審査員もやっている経験から、そのままでは事業にならない状態のなかから、メンターの指導の下、すばらしい作品に仕上がっていく様子を間近で見ていて、それが授業の中でできることであればとてもすごいことだと思う。
就職をしていく上でも、ブレーンストーミングで様々なことを考えて行く時間や経験が大切だと思っている。他の大学との差別化ができるポイントでもあるので、実践の中でさらなる充実をしていくといいと思う。
そのため、開志ビジネスプランコンテストには非常に期待をしている。他の大学の追随を許さないような内容にすることも大学の発展にむけての手ではないかと思った。

徳田委員長：実習が大学の１本の柱であると同時に、ビジネスプランコンテストも本学部の重要なポイントだと我々も考えている。１年生であっても素敵なアイデアを持っていることもあり、その原石を磨いていくことも教員の役目だと思っている。きちんとこのような取り組みを続けていくことも重要だと思っている。

武田委員：できるだけ早くいい提案ができるように頑張ります。
大学の中で懸念事項として挙がる、退学・休学などについては、客観的に見るとベンチャー論的な考えで言うとありだったりするので、変化を常にし続けている大学としての見方もできるので、物事のとらえ方というのはとても大事だと感じた。
起業する人数・割合を見てみると、新潟という土地柄、大学生の起業が少ないことを考えると、悪い数字ではないと思う。伸びている数字こそ注目して、先生方のモチベーションを上げる要因にもしてもらえたらと思う。
今、武蔵野大学がアントレプレナーに力を入れている。そこでの取り組みを参考にすると、海外でのビジネスコンペなどの視察見学をしてみてはどうか？　海外から刺激を受けたり、そこで繋がりを創ったりすることができる。
例：SXSW、オランダでの取り組みなど
学生と話をすると、他大学の学生より、意識が高い、頭がいい、自分客観視できる学生がいると感じる。

徳田委員長：コンテストなどへ導いていく・メンタリングをしていくことなど、バックヤードでの教育も重要なことだと考えている。また、起業支援・ビジネス支援も喫緊の課題だと感じている。今後力を入れて取り組んでいきたいところになるので、ご意見を頂けたら大変ありがたいと思う。
また頂いたご意見を持ち帰って今後カリキュラム改訂に活かしていきたい。今後ともご指導・ご教示よろしくお願いしたいと思います。